

# 韋 いへん 編

愛知大学図書館報

No. 33

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

## 学生の活字離れは本当か？

図書館長 渡辺和敏

わたしは日本前近代の社会経済史を専門としているが、図書館を利用することが比較的少ない。論文執筆のための資料は博物館や資料館、あるいは個人所有者を頼って閲覧することが多く、刊行されている必要図書は原則的に自分で購入しているからである。

だからと言って、図書館と無縁というわけではない。学生時代は、本を買う資金に乏しいので専ら大学の図書館を利用して、卒業論文や修士論文の作成に際しては国会図書館などへ通ったりもした。

愛知大学へ赴任して30年になるうとしているが、図書館との付き合い方は基本的に学生時代と変わっていない。すなわち、常に側においておきたい専門図書や手軽な文庫・新書本などは自分で購入し、利用度の少ない本については図書館を利用している。ただし学生に対しては、大いに図書館を利用するよう、常々指導しているつもりである。

愛大図書館とわたしの関係はこのように比較的希薄ではあるが、ときに予想外の資料・図書に出会ったり、制度上の恩恵にあずかったりもしている。例えば、赴任して間もない頃のことであったが、図書カードに「菱川師宣東海道綱目分間之図」というものがあったので借覧してみると、それは各地の博物館な

どで喉から手が出るほど欲しがっている、かの有名な元禄3年(1690)の菱川師宣による「東海道分間絵図」全6巻の初版であった。何故このように貴重な絵図を愛大図書館で入手できたのか、いまでも不思議に思っている。

別の体験では、ある自治体史の編さんを手がけている最中、江戸時代の紀行文や随筆をみる必要が生じた。当時の社会経済史学でこうしたものを資料とする機会は少なかったのが知識が薄かったが、とりあえず愛大図書館で検索してみた。目指す本は、明治26～30年(1893～7)刊行の全集に収録さ

れていた。国文学専攻の人からみれば当然と思われるかも知れないが、わが愛大図書館に明治年間に刊行された資料集が所蔵されていて、何となく誇らしく感じたものである。

近年では、別のことで愛大図書館から恩恵を受けている。それは、本屋や図書館に回ってこない博物館・資料館の年報とか大学の紀要類を、愛大図書館を通じて複写してもらっていることである。入手不可能な古い図書についても、ほかの図書館所蔵のものから必要部分をコピーしてもらっている。愛大図書館が情報化社会に対応し、ネットワークを介して学内外との連絡を密にしているから可能な制度である。

このような個人的恩恵は別にして、わたし



には愛大生による図書館の利用実態が大きな関心事である。学生にとっては愛大図書館が最も身近で、もしかすると唯一の図書情報収集の施設であるかも知れないからである。

しかし最近の学生のレポートや卒業論文をみると、残念ながら図書館へ足を運び、実際に関連の本を読み込んだ形跡が少なく、ほとんどがインターネットからの情報で済ませている。世間一般で言われているように、やはり今の若者は本離れ、活字離れ現象をおこなっているのであろうか。

そこで2006（平成18）年度版『愛知大学図書館概要』を開き、愛大図書館の入館者数をみてみた。昨年度、すなわち平成17年度の愛大3校地の図書館の年間入館者数は合計79万2,976人、そのうち豊橋図書館は296日の開館で33万9,564人、名古屋図書館は295日の開館で33万8,770人、車道図書館は297日の開館で11万4,642人である。愛大3校地の図書館を合わせれば、平均して1日に約2,700人の入館者があったことを示している。毎日、愛大生の4人に1人は図書館へ立ち寄っていることになる。

この入館者数を過去にさかのぼってみると、同『概要』は詳細な数字ではなく折れ線グラフで示すだけであるが、平成11年度からずっと大体年間80万人前後で推移している。そしてそれ以前の平成6～10年度は大体年間55万人前後である（平成5年以前は表示されていない）。すなわち平成11年に、前年度までの1.45倍の入館者数になり、その状況が今日まで続いているのである。今の若者の本離れ、活字離れを全面的に否定する根拠にはならないが、少なくとも愛大生は10年以前よりは図書館へ出向く回数が増加しているのである。

学生が卒業論文やレポートで必要図書を引用できていないのは、図書館へ行っていないからではなく、その図書を探し得ていないのか、あるいは探し得てもその引用の仕方がわかっていないからである。要は、指導する側のわたしたちの問題であり、それを理解できない学生の問題でもあろう。根気よく指導を続けなければならない所以である。

入館者数が急増した平成11年には何が

あったかという、4月に豊橋図書館の増築・改修工事が完成して図書収容能力と閲覧席数が拡大されている。その前年には、やはり名古屋図書館で閲覧席が増やされ、豊橋・名古屋図書館で開館時間が延長されている。ハード面でも、ソフト面でも、改善をすればそれが直ちに入館者増として反映するのが愛大図書館であることが証明されたのである。

図書館を改善すれば入館者が増える、すなわち愛大生は図書館の改善を暗黙のうちに希求しているのである。若者の本離れ、活字離れが嘆かれているなかで、これは喜ばしいことである。だからわたしたちは愛大生のこうした図書館に対する潜在的な希求に対し、極力応じる責務があるのではないだろうか。

周知のように愛大図書館は、全国の大学図書館と比較すれば多くの面で優れているが、一方で改善しなくてはならない問題もあり、それは特に豊橋図書館において顕著である。名古屋・車道図書館は全面開架式で学生に供しているが、豊橋図書館の開架率はわずかに23パーセントに過ぎない。書庫はパンク状態で、在庫図書の処分を検討するというウワサもあるが、それはトンデモナイ自殺行為であり、早急な増設が不可避である。

図書館職員の配置問題は、豊橋図書館に限らず、名古屋・車道図書館でも再考の余地があるように思う。豊橋・名古屋図書館では夜間・特別開館日を業務委託スタッフで対応し、図書受入れ整理業務もアウトソーシング化しているというし、車道図書館では図書整理・閲覧に関しては全面業務委託をしているという。図書館とは単に本を提供すれば済むものではなく、特に大学付属施設のそれは先に述べたように利用学生への援助と指導という大切な業務があると思う。職員の配置には、こうしたことも考慮に入れるべきであろう。

わたしのこれまでの人生は、必ずしも常に図書館と密接な関係にあったわけではないが、それでも必要不可欠の存在であった。そして今後も図書館の役割は増大こそすれ、減退することはないと確信している。

以上、図書館長就任に際し、求めに応じて思うことどもを記してみた。

（経済学部教授）